

## 第19回「化学物質と環境に関する政策対話」に向けた準備会合

## ディスカッションペーパー

1 日時 令和6年2月14日(水) 10:03~12:05

2 場所 Zoom Webミーティング

## 3 出席者(敬称略) ※陪席者を除く

## 学識経験者

亀屋 隆志 (国立大学法人横浜国立大学 大学院環境情報研究院 教授)  
五箇 公一 (国立環境研究所 生物多様性領域 生態リスク評価・対策研究室長)  
村山 武彦 (東京工業大学 環境・社会理工学院 教授)

## 市民

中下 裕子 (ダイオキシン・環境ホルモン対策国民会議 代表理事)  
中地 重晴 (熊本学園大学 教授)

## 労働団体

森 裕樹 (日本化学エネルギー産業労働組合連合会 副事務局長)

## 産業界

岩崎 雅彦 (一般社団法人 日本自動車工業会 環境技術・政策委員会 製品化学物質管理部会 副部長、日産自動車株式会社)  
西條 宏之 (日本石鹼洗剤工業会 専務理事)  
須方 督夫 (一般社団法人 日本化学工業協会 常務理事)  
山田 春規 (アーティクルマネジメント協議会 運営委員長、ソニーグループ株式会社 品質マネジメント部 環境エキスパート)

## 行政

田中 晃 (神奈川県環境農政局環境部環境課 課長)  
稲角 嘉彦 (厚生労働省 医薬局 医薬品審査管理課 化学物質安全対策室長)

高村 亜紀子 (厚生労働省 労働基準局 安全衛生部 化学物質対策課長補佐)  
(安井委員代理)

照井 秀樹 (農林水産省 大臣官房 環境バイオマス政策課長補佐)  
(清水委員代理)

神田 浩輝 (経済産業省 製造産業局 化学物質管理課長補佐)  
(西山委員代理)

吉川 圭子 (環境省 大臣官房 環境保健部 環境安全課長)

## 4 決定事項

### 第 19 回政策対話(2/28)の位置づけを以下とする。

- (1) GFC の実施に向けて広く浅くいろいろな取組みを伺いながら、GFC のどの戦略目標に親和性が高いかグルーピングし、深掘りや連携できるところを探っていきたい。
- (2) 以下の点について各出席者から1～3分ずつ発言いただき、GFC 策定プロセスを進めていくなど、次の議論に進めていくために今後に向けた取組みが整理できるようにしたい。
  - ・SAICM 国内実施に盛り込まれていた取組みの現在の取組み状況
  - ・各主体で現在進めている、あるいは近い将来進めようとしている取組み
  - ・他の主体が現に行う、又は行おうとしている取組みで光っていると思うもの
  - ・SAICM 国内実施において関与していなかったが、今後 GFC の国内実施に含めるべき主体の提案
- (3) 今回はラウンドテーブル形式でワークショップ的に行い、皆さまのご意見を伺い、GFC の戦略目標に関する取組みの粗密感もみながら来年度以降の議論を進めていきたい。
- (4) 今回の政策対話を来年度以降に始まる GFC 国内実施計画策定プロセスに入れていくためのインプットの場としたい。

## 5 論点および意見

### 論点 1) ラウンドテーブル形式での進め方について

- 政府から戦略目標 A についての発表があったうえで関係主体の取組みについて議論する方が建設的ではないか。
- ラウンドテーブルであいうえお順に話していく方が、対話という観点と、対立した議論にならないという観点でよい。
- スケジュール的な点を含め日本政府としての全体像がまだない段階で議論するのは少し難しいのではないか。
- 今回の政策対話を来年度以降始まる GFC 国内実施計画策定のプロセスに入れていくためのインプットの場としたい。
- 今回の政策対話を各主体が何をやって、どこまで取組みが進んでいて、どのようなことをこれから考えていくのかという情報を得る手掛かりにしたい。
- 2 時間の会合で、事務局からの説明があつて、各出席者が 2～3 分の発表をするということだが、そのあとに何が話せるのか。
- 事務局からの説明時間は極力短く、構成メンバーの 23 名から 2～3 分、計 70～80 分と

ってご発言いただき、その後ディスカッションをする方針。

- 皆がばらばらにいろいろなことを言い出してしまうと、議論として全く収集がつかない。なかなか難しい会議体ではないか。
- 今は GFC の実施に向けて広く浅くいろいろな取組みを伺いながら、深掘りできるところや連携できるものを探したい。
- 大変意欲的でうまくいけば面白い。
- 皆さまが座って話をするというよりは、1つの机を囲んでざっくばらんに話し合いをする中で出てくるアウトプットを期待しているというイメージを持った。
- これまでの政策対話のやり方とは少し違うがやってみようというのであれば、1つのやり方としてあり。
- 事務局か進行役が GFC の戦略目標を理解し、ご発言いただいた後に同時進行的に「今の発言はこういったところにあたるのではないか」といった整理をしながら案を出して、最後に各主体がそれについて議論をしていくというプロセスを取らないと時間的にかなり厳しい。
- しっかり議事録をとって、これまでのやり方ではなく、誰が発言しているか順番ははっきりしていなくてもよいので、ワークショップということを前提でやるということを皆さまが許容できるのであれば1つのやり方としてあり。
- ワークショップ的にやってみるというのは1つの案だと思うが、次回だけで議論が整理できるかという点少し難しい。それぞれにいただいたものを次の政策対話に向けて整理することを前提に、今回は基本的な質問を受けるという形で整理することはできるかもしれない。それがうまくできれば、GFC の枠組の中の粗密関係も分かってくる。今後に向けた取組みが整理できると今後の議論の材料になる。
- 次回の政策対話で完結せず、GFC 国内実施計画策定プロセスを進めていくために、議事録を見ながら次の議論につなげるために整理する。

## 論点 2) 扱うテーマについて

- 「化学物質と生物多様性の問題」のようにテーマを絞って、各主体にどのようなことができるか、あるいは今までできていなかったので取り組むべきという議論をした方がよい気がする。もう少しテーマを絞って議論するのはどうか。
- テーマを絞って議論するとなると、具体的に話せることが狭まってしまい、参加が難しい主体がある。
- 今回は、GFC という新しい枠組みができたので、この段階で一度、各主体がどのような取組みをしているのか、それを GFC の枠組みで当てはめたらどこに該当するのか、それを皆で出し合いながら共有しようということになる。
- テーマは1つだけではなく複数出してほしい。その方が参加しやすい。
- 幅広いテーマで2分程度発表いただく。

### 論点 3) 各主体の取組みと GFC 戦略目標のグルーピングについて

- GFC に関連してやっていくのであれば、抽象的な戦略目標と具体的な取組みを紐づけるなど、関係主体が戦略目標の理解を深められるように進めてほしい。
- 前回の SAICM の点検結果が GFC のどこにつながるのかということ、コンパクトかつ分かりやすく整理する。
- グルーピングとは、ある目標に対して特に関わるステークホルダーについて話し合うものではなく、各主体の取組みが各 GFC 戦略目標の中のどれと親和性が高いか、というようなマッチングを試験的にやってみることである。
- フォーマットを決めると、戦略目標のどこで何をしているかというように、皆さまが同じテーブルの上で早く共通の理解ができる。
- GFC の一覧を裏につけて、フォーマットの一案を考えて皆さまに示す。

### 論点 4) 紹介する取組みについて

- 化学物質管理はトランスバウンダリーなので、国際的にどうやっていくかという議論を進めてから国内に落としていくものである。GFC に向けてという部分については ICCA (国際化学工業協会協議会) の中でこのような議論をしようとしているというようなお話になる。
- SAICM における取組状況を説明するのとほとんど同義になってくる。
- 水銀、水俣条約において蛍光ランプに関して広範な廃止計画があったので、そのような内容もよいのでは。
- SAICM のときの資料を出しながら最近のホットトピックについて紹介いただきたい。
- 農林水産省関係では、みどりの食料システム戦略などのご紹介ができれば面白い。
- 業界の取組みを個社に展開して取り組んでいるので、基本的には業界団体の方からご説明いただく内容と大きく異なるお話ができない。
- 個社だからできること、例えば、財務状況の開示、取組みの中で先進的な、むしろ個社単位の方がいろいろと取り組まれていることもある。ここには参加していない関係の業界をご紹介いただくなど、できる範囲でご対応いただきたい。
- 知的財産保護の観点や独占禁止法から、あまり具体性がない話をせざるを得ない。
- 参考資料 2 に示したような取組み、それに絡めた地域的な課題、生物多様性の話に絡めた取組みがあれば紹介することになる。
- 企業の主体的な活動に任せている。研修会などで理解を深めていくこと、化学産業やエネルギー産業の健全な発展に関するところには力を入れてきたので、そのような活動を紹介する。

## 論点 5) GFC の特徴を踏まえた議論の収束方法について

- SAICMと GFC を比較したときに、「主語の明確化」に加えて「サステナビリティ」という観点が加わっていることも特徴的。
- グローバルな環境問題として「気候変動」、「生物多様性」、「汚染」という 3 つがある。その中でサステナブルな化学品開発をどのように進めていくかという観点も重要。今回の議論を絞っていくのであれば、その点もご検討いただきたい。

## 論点 6) 生物多様性問題をトピックとする点について

- 生物多様性の問題についてあまり取り上げられていない。
- 「化学物質や農薬によるリスクを生物多様性問題にも反映させる」という数値目標が出ているが、その目標を達成するために必要な指標や手法は具体性に乏しく、具体的な議論が行われていない。国内においても、政府が実際にどのようにリスクを減らしていくかということについて何も具体性がない。
- 生物多様性の問題は気候変動と並んで非常に重要な環境問題である。CO<sub>2</sub>の排出削減をしたところで生物多様性の劣化を止められなければ、地球環境の劣化が進み、生態系機能が麻痺すれば人間社会の持続性に関わる。
- 政策対話で生物多様性の問題にどう具体性を持たせて取り組んでいくかという議論をするべき。
- 生物多様性の問題は取り掛かりにくい、その取り掛かりにくさそのものが生物多様性の保全を遅らせてきた原因であり、地球環境変動の対策をも遅らせてきた原因である。もう少し根本的な問題から議論が必要なのは。
- 「生物多様性条約」という縛りでくると、「遺伝子組み換え」などの分野も入ってしまう。これだと、日本がどこまで承認するかという話に絡んでしまうため、農林水産省、厚生労働省、経済産業省など関係省庁の担当の方が困ってしまう。
- 生物多様性、あるいは生物に対する生態影響については、これまでの政策対話でも扱っていなかったもので、1 つのトピックとして取り上げるべき。ただし、今回やるかというのは別の話。

以上